

氏名（本籍） オクムラ リ エ 奥村理絵（千葉県）
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第69号
 学位授与年月日 平成11年3月25日
 学位論文等題目 <論文> 影を詠む Shadow oriented Architecture
 <作品> 影を詠む Shadow oriented Architecture

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	六角正廣
（論文第1副査）	〃	助教授	（〃）	野口昌夫
（作品第1副査）	〃	教授	（〃）	益子義弘
（副査）	〃	〃	（〃）	藤木忠善
（〃）	〃	助教授	（〃）	坪井善昭
（〃）	東京大学	教授	（工学系研究科）	鈴木博之

（論文内容の要旨）

この研究作品は、光と物体と影の関係を反転し、「影」のコンポジションをデザインすることから立ち上がる時空間を組み立てる方法を探し、従来の設計・計画学とは異なるプロセスをもって建築空間の造形化を試みるのが目的である。「光」の「影」に対する優位性は、古今東西にわたって一般的であり、「光」をコントロールすることが建築の空間操作において重要なファクターをしめているのは現在でもかわらない。光と影は表裏一体であるのに、「影」を主とした空間操作はあまり事例をみない。単に通説的なものの見方を反転してみるといった試みではなく、影の文化的コンテクストをさぐり、造形化の方法論を探究することによって、いままでとは違った空間像が現れてくる可能性を探ることは有意義なことであると思われる。

「影」を主とした空間操作を行うためには、観念的なものとしての「影」のもつ意味や性質と、物理的現象としての意味や性質をはっきりと打ち出す必要がある。観念的な「影」に関しては、建築に限らず、時代や地域性、分類をこえてどのように「影」が概念として捉えられてきたのかを様々な文化的コンテクストから読み取る（第一章）。物理的現象としての「影」に関しては、光源を自然光とした時の「物体」と「影」の間に生じる基本的な性質をピックアップし、それを空間的に実体化可能とするための方法を対応づける（第二章）。ここで、光源を自然光に設定したのは、人間にとっての「影」の観念が形作られたベースは「自然光＝太陽」と、「物体」とによって作り出されるものであったからであり、まずはこのプリミティブな関係性から考えることが重要なことだからである。

このようなプロセスを経て、「影」の観念と、物理的性質から導き出される「影」を空間に意図的に発生させる方法とを相互リンクさせて自在にコントロールすることが可能となったときに、

詩歌にさまざまな思いや意味をかけてうたうことを「詠む」というように、「影」のもつ多面性、ゆたかな意味空間を「詠む」ことが可能となるはずである（第三章）。

本研究作品論文は、大きく下記の三部構成で記述される。

第一章においては、観念的な「影」をとらえるために、「影」の記述を文化から哲学、心理学等さまざまな角度から照射する。もともと「光と闇」という対立図式だったものが「光と影」という近代的対立に移っていった過程を読みとき、「光と影」という図式のなかでより強度に光を拡張していった近代建築をとりあげ、その方法を概略するとともに、問題点を浮きぼりにする。また、影が空間に多大な影響を及ぼす事例を数点あげる。

第二章では、特に自然光を対象としたときの、影から空間を造形する方法の具体的な創出のプロセスを示す。影と影を落とす物体の関係の性質（影の資質）、幾種類かの基本的な要素をピックアップし、さらに影を落とすモノと、影の関係に影響を与える事柄、「朝昼晩」（1日）、「春夏秋冬」（1年）というパラメータをスタディによって段階的に検証すると同時に物性と影の関係を考察する。

第三章は、第一章においてみてきた影の概念から、空間にポジティブに働きかける要素を見出す。なぜ、影が魅力的であるのか、影をとりあげる意味を考察し、二章で得た影の空間操作法を用いて、作品化したものの解説である。